

## トピックス

## 2016年の佐賀県におけるタマネギべと病の発生状況と今後の防除対策について

佐賀県農業技術防除センター 善 正二郎  
 佐賀県農業試験研究センター 菅 信一郎

## はじめに

タマネギべと病は、卵菌類の *Peronospora destructor* により引き起こされる病害であり、タマネギにおいて被害の大きな病害の一つである。本病は、1955年ころに大阪府や兵庫県で多発生し問題となったが、本病の発生生態や防除法等に関する研究が精力的に行われ、その成果に基づいて集団散布などが実施され被害は減少した(高津, 1957)。その後、1984年ころに兵庫県で再び多発生したが、それ以降はフェニルアמיד系のメタラキシル剤が主体に散布されるようになり、発生はするものとの問題となることはなかった(田中ら, 1989)。このような中、2016年に本病が西日本各地で多発生し、広く被害をもたらした。特に、作付面積が北海道に次いで全国第2位の佐賀県では、中晩生品種を中心に甚大な被害を受け、記録的な不作となった。そこで、本県ではこのような事態を繰り返さないために、多発要因を明らかにするとともに防除体系を見直し、本病が発生しにくい圃場環境作りなどの被害軽減対策について、地域(市町、農業団体)と県関係機関が一体となって取り組んでいるので、その内容を紹介する。

## I 2016年産タマネギでのべと病の発生状況

2016年産タマネギについて、佐賀県農業技術防除センターが2015年10月下旬から2016年5月上旬にかけて県内4地区の早生マルチ栽培(播種:9月20日前後、移植:11月中旬~12月上旬,収穫:4月下旬~5月上旬)8圃場、中生・晩生露地栽培(播種:9月25日前後、移植:11月下旬~12月下旬,収穫:5月中旬~6月上旬)8圃場、計16圃場でべと病の発生調査を行った。結果は図-1の通りである。越冬罹病株の発生は、2016年1月5日に初めて認め、その後、徐々に増加し、3月下旬に発生株率が1.4%(平年0.3%)の多発生となった。一

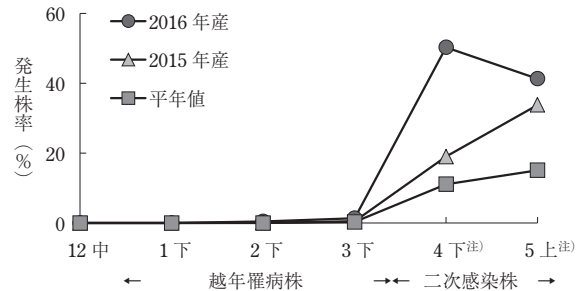


図-1 タマネギべと病の発生推移  
 (佐賀県農業技術防除センター調査)  
 注) 4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査。

部では、越冬罹病株の発生株率が10%以上と激しく発生した圃場も見られた。このため、2月4日と3月10日に注意報を発表し、現場で防除対策について注意喚起を行った。しかし、早生マルチ栽培タマネギでは4月上旬に多くの圃場で発生し、中生・晩生タマネギに甚大な被害の発生が予想されたため、4月5日に警報を発表し、さらなる薬剤防除の徹底を呼びかけたが、すでに感染が進んでいたこともあり、十分な効果は認められなかった。4月以降には、二次伝染株が急増し、発生株率は4月下旬時点で50.3%となり、平年と比べて多発生となった。

品種の早晚別の被害程度は、早生品種ではべと病が発生した時点で鱗茎の肥大が進んでいたため被害は軽微であったが、中生・晩生品種では本病の多発生により茎葉が早期に枯死した結果、タマネギ鱗茎の肥大が妨げられ、著しく減収し、本病の多発生によって、全量を廃棄した圃場も一部で見られた。

## II タマネギべと病の多発生要因

2016年産でべと病が多発生した要因については、現地圃場での調査や試験研究による試験の結果から以下が挙げられる。なお、これらの要因については、現地での発生状況からの推測も含まれており、あくまでも参考としていただきたい。

## 1 圃場内の菌密度の増加

罹病残渣が次作の伝染源になり、残渣持ち出しは防除

The Occurrence of Onion Downy Mildew (*Peronospora destructor* (Berkeley) Caspary) in Saga Prefecture in 2016 and its Control.  
 By Shojiro ZEN and Shin-ichiro SHOBU

(キーワード: タマネギべと病, 発生要因, 防除対策)